

氏名(本籍)	中 <sup>なか</sup> 里 <sup>ざと</sup> 亮 <sup>りょう</sup> 平 <sup>へい</sup> (東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第5592号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	祭礼の現代的状況における内部と外部 - 動態的祭礼の理解からみる「相互承認的共同」 -
主査	筑波大学教授 博士(文学) 古家信平
副査	筑波大学教授 博士(文学) 伊藤純郎
副査	筑波大学教授 博士(文学) 徳丸亜木
副査	筑波大学教授 博士(宗教学) 津城寛文

## 論文の内容の要旨

本論文は、これまでの祭礼研究が地域共同体の内部の結束を図るものであるという前提に拘束されており、祭礼に見出される葛藤、競争といった側面をとらえきれていないという近年の指摘をふまえ、祭礼の内部ばかりでなく外部の人々の動向を考慮し、常に揺れ動く生々しいものとして祭礼を理解しようとする事例研究である。事例とするのは東京都府中市大国魂神社の例大祭で、ここでいう「内部」とは祭礼を運営し中核となって祭礼に参加する人々であり、「外部」とは観客をはじめとしそれぞれの思惑で祭礼に関わる人々である。昭和30年代以降を現代的状況ととらえ、内部と外部の境界はあいまいであり、そこで達成されるのは「相互承認的共同」と名付けられる新たな共同であることを論証することを目的とする。

序章では、先行研究を批判する中で、立場、経験、主張の異なる人々の実践がぶつかり合い、常に揺れ動くものとして把握する動態的な理解を目指すことが調査対象を具体的にふまえながら示される。昭和30年代には祭礼が日常的な活動、価値、規範、利害などによって監視され規制されるようになってくるが、このように外部からの干渉をうける状況を現代的状況ととらえる。筆者は府中市大国魂神社の例大祭について2004年から調査を開始し、2005年からは祭礼組織の一つに属して、いわば内部の一員という立場で参加してきた。このことは参与観察の枠を超えて資料化を図ることが期待できる半面、第三者としての眼を失いかねないという制約を併せ持つことになる。これについては儀礼の文脈と関連づけて記述の中に自身の位置を示すとともに、新聞資料等を併用することで対応できるとし、調査者が祭礼の現場に参加し、見聞し、体験したことを資料として用いる祭礼理解の方法を提起することでもあるとする。

第1章「調査地とくらのやみ祭概要」では、歴史的背景を述べ、今日の祭の運営について述べる。明治維新により社領を無くし経済的基盤を失った神社から明治10年代に8つの宮の神輿が本町、番場、新宿、八幡町に委託された。この町内がシカチョウと呼ばれ、旧北多摩郡を中心に埼玉県、神奈川県にまで広がる代参講とともに、今日に至るまで祭礼の内部を構成することを指摘する。府中市の人口が昭和30年代はじめから10年間で3倍に増加し、米軍極東司令部が移転し農村部が住宅地になっていくなどの変化と関連して、大国魂神社例大祭(くらのやみ祭)が大きく変貌を遂げる。神輿を持つ8つの宮にはそれぞれ人口の増加によっ

て町内の組み換えが生じ、代参講は一部を除いて衰え、それに代わって神輿の担ぎ屋集団が参入する。シカチョウの人々が府中市の人口に占める割合は5パーセント程度になり、それまでの運営に対して外部の批判が高まり、神輿渡御中止や時間帯が変更され、各宮の上部組織として大祭委員会（1969年）、青年大祭委員会（1979年）などが出来たことを概観する。

第2章「くらやみ祭の現代的状況」では、昭和30年代から40年代にかけての内部と外部の絶え間ない対立と葛藤の状況を外部、すなわち①警察・教育委員、②市議会、③米軍の司令官の言動、④祭りブームなどに関連づけて検討する。新聞記事を通時的に整理し、祭礼で負傷者が出るなどの治安の悪化が問題とされ、それを当然視する内部の人々に対し、新住民の主張を代表する警察・教育委員という外部との対立の構図を指摘する。「シカチョウが支配している祭のあり方が続く限り改革は不可能だ」という発言が端的に当時の状況を言い表している。さらに、内部のものだけの意向による祭礼から市民の祭りへという外部化の方向が市議会からも提起され、それに反発した内部の人々により深夜の神輿渡御は昭和35年に中止された。夕方の渡御として復活するが、宮ごとの対応の違いが顕在化して、それらを統括する大祭委員会が設けられることになる。聞き取りの調査からは、米軍の司令官の評価が市議会議員を動かし、神輿同士のけんかを見世物とした祭礼を変更させる力となったことが明らかにされる。新住民に代表される外部がくらやみ祭りを自らの祭礼としてとらえない人々として誕生し、祭礼が「同一の社会集団」のものではなくなった状況が生じ、内部との間に絶え間ない葛藤が起きるようになったと指摘する。さらに、昭和40年代中ごろからのいわゆる祭りブームにより内部の人々が三社祭などに参加して自らを振り返ることにより、神輿の担ぎ方が変わり、女性の参加を認め、半纏を着用するようになるなどの変化が生じる。これは担ぎ屋集団という新たな外部との接触によるものであり、内部にも同様の担ぎ屋集団を生む契機にもなった。このように内部の人々が、他地域の祭礼には外部のものとして関わりを持つ新たな現象も現代的状況としてとらえることができる、と指摘する。

第3章「祭礼の現代的状況における内部」では、参与観察によって得た資料を用いて、3つの観点から内部の人々の抱く祭礼に関わる意識を分析する。第一に非日常的な場である祭礼における正統な権威、すなわち伝統とか歴史といった言葉でそれ以上の説明を回避でき、正しいものであると認識される権威について検討し、現代的意義を明らかにする。シカチョウの一つである八幡町から区画整理によって分離された緑町が、青年会の活躍によって昔から決まっているはずのシカチョウの一員として認められていった経緯を検討し、正統な権威が不変ではなく変容することを明らかにし、それでも「昔から決まっている」こととして文脈に応じて主張がなされ得ることを事例で示しつつ明らかにした。第二に祭礼で起こるもめごとを解決する「顔が利く」人々がおり、祭礼の運営に欠かすことのできない存在としてリーダーシップを発揮することを取り上げる。①喧嘩が強く強面である、②「徳を売る」、③新興の組織の長として存在感を示す、ことで周囲から認められていくのであり、相互承認的であることを明らかにする。顔の利く範囲はくらやみ祭りの内部の人々が認識するところの「府中」であることを明らかにした。第三に、もめごとの当事者、関係者、処理法を具体例にもとづいて検討し、明文化されたルールとそうではないルールがある。前者は昭和30年代以降に外部からの批判を受けて創られていること、後者は祭礼の現場で気に入らない人間に暴力がふるわれる事例を検討し、その都度現場で更新される相互承認的なものであること、これを共有していると思いこむことで内部の人間であると認識すること、が明らかにされた。ここまでの議論をまとめて、祭礼とは内部の人々が共同行為を行うことによってお互いを仲間、身内であると認識する場であり、それは常に外部を意識しながら祭礼の現場で相互承認的に更新される、と述べる。

終章「現代における祭礼の理解」では、祭礼の内部と外部についてまとめる。祭礼の内部ということが可視的に認められるのが半纏であり、宮ごとに半纏合わせと呼ばれる顔合わせが行われ、その着用によって内部の人間であることが認められる。さらに、行政単位としての府中市とは異なるが、かつてシカチョウがそ

の中核を占め代参講の人々が集った「府中」を相互に承認することで祭礼は成り立っており、内部の人間は架空の存在である「府中」を作り上げている。古き良き地域の表象として「府中」を見出しているのである。祭礼に参加することで、祭礼という「実践の文化」を自分のものとし、「府中」というものを自分の中で作り上げていき内部の人間になっていくのである。換言すれば、「府中」を媒介にして相互承認的に認めあった人々の集まりが祭礼の内部ということができ、それは常に祭礼の場で更新され、作り直されるものである、と述べる。集うこと、すなわち絆と見るのではなく、何が絆であるかを意識させ、新たな共同性のあり方を問うならば、参加者がそれを共有しているものとしてふるまうことによってのみ達成される「相互承認的共同」である、と結論する。

### 審査の結果の要旨

本論文は、著者が祭礼の参加者となって得た大国魂神社例大祭の7年間にわたる調査資料をもとに、新たな祭礼像を描き、集団の成員がその一員であることを再確認するためのものという古典的祭礼論を乗り越えようとする意欲的な論考である。町内という単位が崩壊し、住民の流動性が高い地域社会の祭礼をとらえる場合だけでなく、著者が提起する「相互承認的共同」という概念は、祭礼以外の民俗を考察する場合にも参照すべきものといえる。著者が対象とした昭和30年代以降は、高度経済成長期と重なり、それ以前の人々の生活とは大きな断絶が認められ、現代民俗論の文脈において検討が進められてきた。本論はそうした観点からみた場合に大きな貢献をなすものといえる。ただ、祭礼に対する外部からの批判が検討されているが、市民社会として成熟していく時期にあたることから検討の範囲をさらに広げる必要が感じられる。それにより丹念に収集された語りをその背景とともに把握することができ、論述に生かすことができるであろう。結論の部分には荒削りなところもみられるが、これからの課題、補足すべき側面とその方法が明らかにされており、今後の展開が大いに期待される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。